

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：34517

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03040

研究課題名(和文) 英語論文執筆における学習者のスタンス表明 機能言語学の知見を利用して

研究課題名(英文) Revealing stance in written English

研究代表者

川西 慧 (Kawanishi, Kei)

武庫川女子大学・文学部・准教授

研究者番号：10779242

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学術論文の文献レビューセクションに焦点を当て、学習者が他者の研究を読み、スタンスを形成し、それについて執筆する際に自身のスタンスを表明する様子を観察した。大学1年生の学習者の間では限られた種類の伝達動詞が多くの場合辞書や日本語の翻訳の影響を受けつつ使用されることがあり、(指導を受けた)大学4年生の学習者の中では、スタンス形成やスタンス表明の際の表現に対する意識を持っていることがわかった。しかしながら、実際の執筆成果物の中においては指導後もスタンス表明でつまづくことが多くみられ、インタビュー調査を通してスタンス形成と表明の二段階にアプローチをすることの必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語による学術論文執筆は、英語を母語としない者にとって研究を執行する上で大きな課題であるが、国際的な競争力が重視されるグローバル社会の中で必要不可欠である。本研究は特に学術論文の文献レビューセクションに着目し、学術の場において周辺的な構成員である大学生のスタンスの表明及び交渉に関する方略を記述することで、学習者のスタンス形成と表明の過程を明らかにした。こうした観察・記述の比較をもとに、大学におけるライティング指導、およびカリキュラム考案の一助とするものである。大学生を対象とすることで、高等学校と大学院の間にある学部教育から学術目的の英語を見直し、連携を図ることに資すると考える。

研究成果の概要(英文)：This research focused on the literature review section of the research paper, and investigated how students create their stances against readings, and how they reveal their stances in second language academic writing. Literature review, observation, and empirical studies were conducted. In first-year students, it was found that many students used the same set of reporting verbs, and their choices seemed to have been affected by dictionary and translations. In fourth-year students who have received some instruction of academic writing, it was found that many paid attention to their stance and use of language, while the final written products often showed some difficulties of translating what they had in mind. Interviews confirmed that learners were conscious of both stance creation and revelation. This implies that instruction can target the two-fold process.

研究分野：外国語教育論

キーワード：academic writing stance critical thinking reading to write writing to read

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英語による学術論文執筆は、英語を母語としない者にとって研究を執行する上で大きな課題であるが、国際的な競争力が重視されるグローバル社会の中で国内の大学がその影響力を獲得するために必要不可欠である。

2. 研究の目的

本研究は、特に学術論文の先行研究の文献レビューセクションに着目し、学術の場において周辺的な構成員である大学生のスタンスの表明及び交渉に関する方略を記述することで、(英語熟達度、研究ともに)卓越した書き手のライティングとの比較を可能にすることを目的とした。また、こうした記述の比較をもとに、大学におけるライティング指導、およびカリキュラム考案の一助とするものである。学術の場の周辺的な構成員である大学生を対象とすることで、高等学校と大学院の間にある学部教育から学術目的の英語を見直し、連携を図る。

3. 研究の方法

本研究では、文献研究、観察、実証研究を行なった。実証研究の一部では、量的な実証研究を予定していたが、コロナウイルスパンデミックとの重複のせいで大学の授業形態が変わり、大規模な量的研究を実施することが不可能であった。そのため、少人数での質的調査に切り替え、観察とインタビューを含めてスタンス形成と表明の様子を詳細に観察、説明することとした。

4. 研究成果

本研究では、学術論文の文献レビューセクションに焦点を当て、学習者が他者の研究を読み、スタンスを形成し、それについて執筆する際に自身のスタンスを表明する様子を観察した。文献研究、観察、実証研究を行なった。大学1年生の学習者の間では限られた種類の伝達動詞が多くの場合辞書や日本語の翻訳の影響を受けつつ使用されることがあり、(指導を受けた)大学4年生の学習者の中では、スタンス形成やスタンス表明の際の表現に対する意識を持っていることがわかった。しかしながら、実際の執筆成果物の中においては指導後もスタンス表明でつまづくことが多くみられ、インタビュー調査を通してスタンス形成と表明の二段階へのアプローチをすることの必要性が示唆された。

下記に観察・実証研究の具体的例を挙げる。学習者の執筆する文献レビューについて詳細を知るため、二言語により執筆される卒業論文を分析した。すると、英語論文において“X is important”など attitude markerの形容詞を利用し、正の価値判断をしているかに見えた文や表現において、日本語論文では「話題に出てくる」、「～についてさまざまな論争がなされてきた」などと客観的・中立的な表現であることなどがあった。また、伝達動詞の語彙の種類については、日本語でも英語でも「述べている」や“state”が多用されるなど、バリエーションに富んだものを選択して使うことの難しさが見てとれたが、伝達動詞の時制・相については、英語のものにおいては自身の形成したスタンスに関係なく過去形や現在形に統一してしまいがちなことと比べ、日本語の論文においては、自身のスタンスに合わせ、心的距離を取るために過去形を使ったり、自身の意見との近似性を表すために現在形を使うなどということが自然にできている様子であった。こうしたことについて、学習者との個別面談 (conferencing)において尋ね、指摘すると、日本語表現については驚いたような反応があることから、ある程度内面化

された言語使用であることがわかれた。また、指導後において、明示的な知識や意識があったとしてもスタンスの表明が適切な英語表現を伴って現れることはあまりなく、この項目の難しさが明らかとなった。

明示的な意識を向けてスタンスを表明しようとする学習者がいる一方、こうした項目が難しいと感じ、回避方略 (avoidance) を取る学習者も見受けられた。こうした学習者においては、文献名を名詞として使い、伝達動詞を使って報告する要約スタイルを回避し、研究で扱われるテーマを主語・主体として事実のように文章を執筆し、文末に文献名をカッコ書きで入れるスタイルが見られた。

これらのことから、学習者のスタンス表明に関しては、スタンスの形成ができていても、スタンスの表明時点で、「典型的」だとされる語彙の選択や時制・相の選択が行われないことがわかった。近年、書き手の多様な背景を考慮し、必ずしも「ネイティブスピーカー」の典型をものさしに「誤り」というレッテルを貼らないという動きもあり、実際にAcademic Literacies研究の中においてもこうした規範的アプローチは批判されている。ただし、誤解を招きやすい表現であることや、書き言葉という時空的文脈から切り離されやすい媒体を考慮すると、やはりある程度の規範や典型を期待される部分があるだろうと推測される。研究の中において、母語（日本語）によるライティングではこうした典型的・規範的な表現・文法の選択があったことについても、学習者本人の言語の知識・力によってスタンス表明に影響が出やすいことをうかがわせる結果となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川西慧	4. 巻 1
2. 論文標題 学部生のライティングにおけるスタンス表現の探索	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JACET関西支部ライティング指導研究会紀要第14号	6. 最初と最後の頁 51-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 川西慧・細越響子
2. 発表標題 研究論文作成におけるスタンスの形成と表明：学部生の執筆過程の探索的研究
3. 学会等名 第203回東アジア英語教育研究会（西南学院大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kei Kawanishi
2. 発表標題 Concrete or abstract? Supporting EFL thesis-writing with genre-based grammar
3. 学会等名 Faces of English 2: Teaching and researching academic and professional English（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kei Kawanishi, Akinori Usami
2. 発表標題 Finding a stance: Exploring Japanese university students' writing processes and stance formation in L2 writing
3. 学会等名 AILA 2021 World Congress of Applied Linguistics (Groningen/Online)（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	宇佐美 彰規 (Usami Akinori) (10648356)	武庫川女子大学短期大学部・英語キャリア・コミュニケーション学科・准教授 (44523)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------